

第2章

＜セング＞の再創造とその現代的意義 ータンザニア・マテンゴ社会の事例をめぐってー

杉村和彦

要約：

タンザニア・マテンゴ社会における内発性を志向する持続的社會開発の事例の中で、伝統的組織原理としてのセングという社会慣行の再創造と開発の接合のプロセスを取り上げた。その中で近代化論・市民社会論・アフリカ農村にかかわる今日の複雑な問題状況を再検討し、＜セング＞の再創造の中に見られる、アフリカ的共同体の開かれた性格と公共性のあり方について論じた。

キーワード：

タンザニア セング 再創造 公共性 市民社会 共同体 内発的發展

はじめに

今日アフリカにおける様々な開発の場面において、「市民社会」の形成の重要性が語られるが、同時に、＜アフリカ＞という磁場と触れ合う中で、ヨーロッパ社会を淵源とするような「市民社会」論は大きな変形を経験している。遠藤がエケウの議論を借りてアフリカにおける市民社会論の一つの流れを指摘するように（遠藤[2001：150-154]）、アフリカにおいては、市民社会論を

<民主化>というような西洋流のリベラルな政治学の中にある公共性なるものの関係だけで捉えようとしても、アフリカの「市民社会」的空間には届かない。アフリカの中では、エスニックグループや血縁・地縁を含めた、通常の「市民的公共領域」を越えた「政治空間」の中に、多数の「市民社会」的な組織が存在しており、そこで活動する主体は非常に活発であり、これはアフリカの社会動態の中で一つの意味を持って機能していると考えられる。しかしこれまで、このような「原初的公共領域」と言えるものとそれと関係づけて社会変容を捉えることの重要性は、日本人による研究の中では、アフリカ都市の住民組織におけるインフォーマルセクターの役割に着目し、生活集団の生きがいや幸福という住民の「実存」に光を当てて、社会開発におけるその創造的側面を指摘してきた松田などの論考を除くと、必ずしも主題的には展開してこなかった（松田[1999：229-231]）。

一方、近代化論という文脈の中で市民社会論を位置づけようとしても、まず、アフリカの市民社会の培地としての都市、さしあたりその都市化のプロセスを検討する中で、きわめて困難な状況に出くわす。都市化は共同体から離脱した個人を生み出すはずであったが、独立後10年たっても、「脱部族化」した市民は出現しなかったし、ナイロビやナイジェリアなどの大都市においても民族的紐帯は解体されるどころか、むしろ強化されるということが見られた（松田[1999：199]）。

とりわけアフリカ農村共同体と近代化論の間にある軋みは、他の社会と比較しても、その共同体がとりわけ近代化を拒む障壁となるものであるとして、赤羽やハイデンによってそのユニークネスが指摘されてきた（赤羽[2006], Hyden[1980, 1983, 2006], ハイデン[2007]）。ただし1960年代の後半にこの問題に着手し、日本の市民社会論と連関する一つのアフリカ農村の住民組織理解のプロトタイプを作り出してきた赤羽の時代状況と比較すると、以下のような点に差異が認められる。一つは今日の市民社会論の中の公共性論とかかわる共同体のあり方として、その後のアフリカ農村社会研究蓄積によって認められるようになってきた、より流動的に再編していく開かれた共同体とし

ての特質との関連を再検討する必要があることである（峯 [2001:193-195]）。

もう一点は、近代化論そのもののゆらぎであり、第三世界の内部においても、西洋的な近代化をモデルにした、外発的、産業主義的なこれまでの発展論に対して、もう一つの発展、持続的発展や内発的発展というような視点が広がってきており、こうした論点との関連で「市民社会」論そのものの位置を再検討する必要もでてきていることであろう（杉村 [2004]）。

小稿は、以上のような近代化論・市民社会論・アフリカ農村にかかわる今日の問題状況を踏まえて、タンザニアにおける内発性を志向する持続的社會開発の事例として、京都大学アフリカ地域研究センターとソコイネ農業大学の協力の下、JICA によって行われたマテンゴ社会における技術協力の事例（杉村 [1999, 2003]）の中で、伝統的組織原理としてのセングという社会慣行と開発との接合のプロセスを取り上げる。セングは、もともとマテンゴの共同体の共食慣行や協議の場として機能する社会慣行であり、社会変容の中で一旦解体したものであったが、上記のプロジェクトの中で突如その言葉が蘇り、アフリカ的な内発的発展を支えるものとして重要な意味をおびることとなった。筆者はこれまでアフリカ農村の共同性の特質を、消費の世界や再生産の仕組みとの関係で捉えるとともに（杉村[2004, 2007a, 2007b, 2007c]）、このような契機によって作り出されるアフリカ農村の共同性が他の地域社会と比較したときに見せる開かれた共同体の性格に言及してきたが（杉村 [2004]）、このプロジェクトの中では、こうした農村の在来の住民組織の組織原理と市民社会の学としての社会開発が対話することになったのである。

ここでは、1 節でセングの世界を中心にマテンゴ社会を紹介し、2 節ではプロジェクトの中でのセングの再創造について述べる。まとめでは、公共空間と共同性、アフリカの市民社会論との関係でこの事例を位置づける。

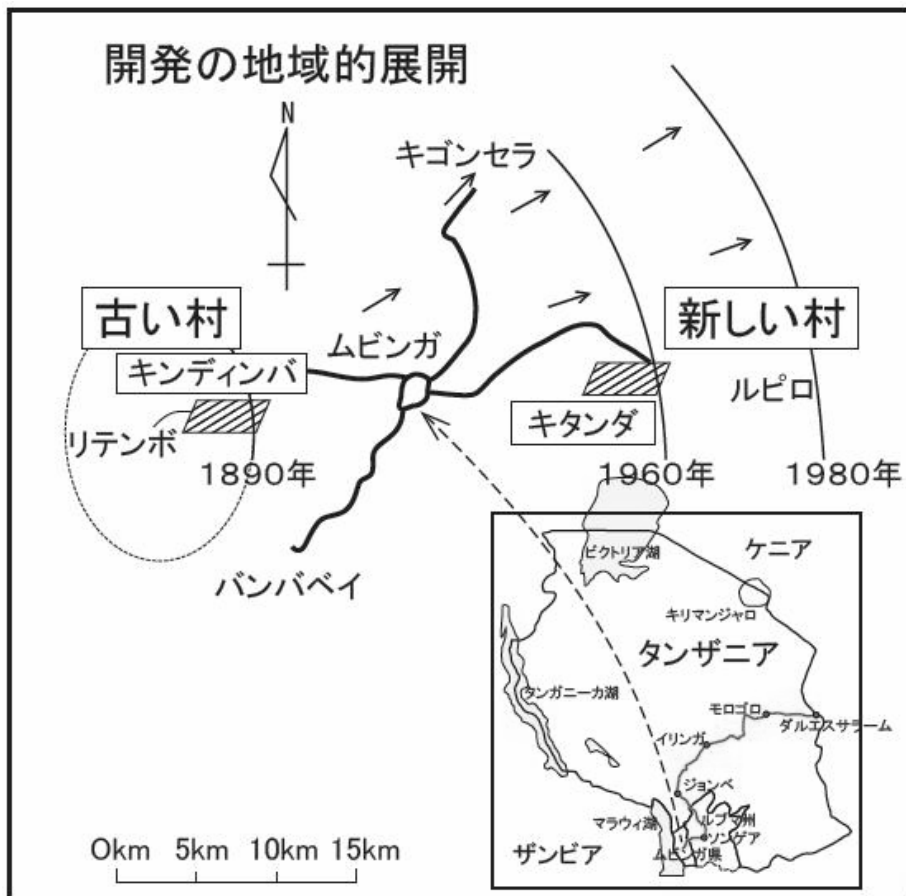
1. マテング社会とセングの世界

(1) マテング社会の生態

タンザニア・マテング社会はアフリカ農耕社会の中でもとりわけ高密度の人口をかかえ、ンゴロ（掘り穴耕作）やコーヒー栽培に見られる集約的な農業を行う集団である（加藤[2002]）。マテング社会には、図1に示されるように、開発の歴史の古い高地と開発の歴史の浅い低地の違いがあり、農業集約的かつ人口密度の高い古い村と農業粗放的で人口密度の低い新しい村というように、土地利用の集約度と人口密度などにおいて大きな差異が認められる。また社会構成においても、高地（キンディンバ）には老人層を含む年長者が多いのに対して、低地（キタンダ）には、若年層が多いという特徴が見られるという違いがある。このように共時的な農村形態を見れば、マテング社会の中には、社会・文化的に極めて大きな差異が認められるが、新しい村の再編の様式も基本的に古い村のあり方を踏襲したものであり、集落は人口増加によって一種の遷移現象を重ねながら、時代を重ねることによって新しい村は古い村に近づいていく。

次に村落内部の伝統組織についてそのありようを取り出しておこう。マテング社会における村落形成の大きな特質は、ミクロな村落レベルで見ても地域集団が一つの血縁集団からなる社会組織にはなっていないことである。すなわちマテング社会では、コミュニティレベルで、その地域社会が、3-4世代の拡大家族をユニットとした異質な血縁集団の緩やかな連合体として組織されたものである。これは村落内部では、このそれぞれの単位集団が、ンタンボ(Ntambo)という山裾の水系間で挟まれた小さな一尾根の領域を占有している。マテング社会において、ンタンボは、今日においても地理的な基礎的単位として機能するとともに、同時に社会的基礎的な単位として機能しており、マテングの民族生成史ともかかわると考えられる（Basehart [1972]）、地域集団の編成の様式は、人口増加を契機としており、マテング人の生活様式や行動様式の社会経済的背景をつくりあげている（加藤[2002:94]）。

図1 マテンゴ社会における新しい村と古い村



(出所) 筆者作成

(2) 村落形成とンタンボの意味

ここでは、古い村の一つであるキンディンバ行政村を事例として取り出してみよう。タンザニアの中でもキリスト教の普及は早く、キンディンバ村には1909年にカソリックの教会が作られ、それによって学校教育の端緒が作られ、1930年に学校教育のほかに識字教育が行われるようになっていく。しかし当時のマテンゴ社会は、いまだジュンベ・マプータという伝統的リーダーの統治下にあった。

キンディンバ行政村は1996年の時点で、図2のように、キンディンバ

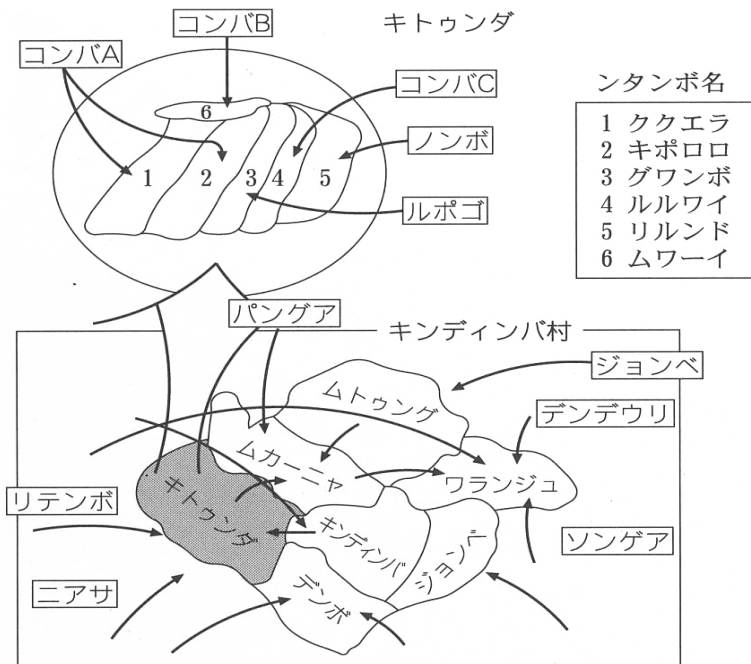
(Kindimba)、キタンダ (Kitunda)、ムカニャ (Mkanya)、ムツング (Mtungu)、ワランジ (Walanzi)、ジョンベ (Jombe)、デンボ (Dembo) の7つのキトンゴジ (集落) からできている。この中でおそらくキンディンバ、キツンダ、デンボが最も古い集落である¹。

マテング社会の大きな特質は、村落の内部構成という視点から見ると、村落内部の各地区が一つの血縁集団ではないことである。すなわち、そこでは一つの地区をとっても異質な血縁集団の緩やかな連合体によって組織されていることである。その基礎的な単位集落となるのが、すでに述べたような一つのンタンボをしめる一つのクランである。この点を示すために、ここでは、この村落内部のミクロな村落の形成過程を、図2の中のキンディンバの中の古い集落であるキトゥンダを事例として見てみよう。村落の開発において一般的に最初にやってきた人は山腹のンタンボの中腹に居住し、開発する。マテング語でルペンビ(Lupembi)として知られるンタンボは拡大家族やクランが生計を支えるのに十分な土地という意味である。ルペンビについての地域ごとの文化的意味にも差異が見られるが、村人が少なくとも「十分」というとき、その土地のひろがりには3-4世代の要求に見合うものであることを意味しているといえることができる。

このンタンボと村落形成の関係を、図2に示したキンディンバ村の行政単位の一つであるキトンゴジ (集落)、キトゥンダで見てみよう。キトゥンダには6つのンタンボがあり、その中に一つ二つの Balozi (10人組) が組み入れられている。キトゥンダの最古老の一人の話によれば、その開発過程は、コンバ (Komba) クランの人々によってククエラ (Kukuela) のンタンボに始まりキポロロ (Kipololo) のような隣接のンタンボにも拡大していった。同時に増加したコンバの人々や他の地区から来たルポゴクランの人々はグワンボという名前のンタンボに居住するようになった。開発の始まった当時、グワンボやリルンドという名前のンタンボがある地域は、深い森林に覆われていたが、現在グワンボというンタンボはルポゴの家族、コンバの家族集団によって占拠されており、リルンドはノンボクランによって占拠されている²。

このようにマテンゴ社会においては集落内部を構成するンタンボのレベルで異なるクランが占拠するという形でエスニックグループが極めて混住している。このような様態が、マテンゴの村落形成の基本的パターンとして取り出すことができるだろう（杉村[1999:138-140]）。

図2 キンディンバの村落構成



(出所) 筆者作成

(3) セングの原像

マテンゴ社会は今日においても、〈自給部分〉の確保の過程によって動かされる社会的移動をともなう社会である。しかもこの過程は、社会変化が具体的に展開していく新開地では、世帯単位ではなく、次世代さらには次の世代も射程に入れた拡大家族にかかわる変動主体によって突き動かされていく。

1940年代に入るまでの伝統的な暮らしの中では、すでに見たようなンタンボを一つの生活領域とした村の生活があり、その中で、内部の自己組織化を

図る母体となったのが、ムシ(Musi)という拡大家族であり³、その集団の紐帯となる共同性を作ったのが、セング(Sengu)という社会慣行であった。セングでは、ンタンボのなかの集落に住む人々が食事をともにしながら話し合い、ときにさまざまな問題の解決策について議論したという。その話の中には、結婚の相手をどのように決めるか、ンゴロの的確な作り方はどうかなどということが、長老から語られていき、若者は自由に質問をし、議論が展開されていったという。

それゆえ自給的生活に支えられたこの時代には、生活の単位は世帯よりもこの拡大家族にあったといってもよいだろう。この社会慣行が解体する大きな契機となったのが、1930年代から急速に村の内部に展開していったコーヒー栽培である。この中でセングの慣行は崩壊し、ムラの中では、ムシを統合するリーダーの不在という状況が生み出された。コーヒー栽培は各世帯ごとに行われ、それぞれの労働時間を高め、生活の個別化は展開していった。このコーヒー栽培によって共食の慣行は解体され、各ムラごとのリーダーの不在という状況になった。このような中でンタンボの利用の統合的利用状況も個別化していった（杉村 [1999:145]）。

しかしセングの世界の中で培われていった社会慣行は、制度としてのセングが解体した後も、マテングの社会の中で日常的な〈歓待の風〉のような形で日常的な慣行として残されている。これは生活集団の内部でもてなしというよりも、むしろ外部から来る人を過剰ともいえるかたちで招き供応するというような習慣の中に残されている。ここにはマテング社会の中で、狭いムシの内部の共食や協議の場としてだけでなく、村落の各ムシ間やより広域的な人とのつながりを積極的につなぐ場として機能してきた、社会慣行としてのセングのハビトゥスが再生産しているということもできるだろう。

2. セングの再創造

(1) セングの記憶とその時代

1994年からJICAの研究協力プロジェクトとして京都大学とソコイネ農業大学の協定の下、「ミオンボウッドランドにおける農業生態の研究」(JICA[1998])が始まった時は、マテング社会においては、セングという慣行は、すでになくなったものとして、人々の記憶の片隅にかすかにとどめられる存在であった。筆者がこの言葉と出会ったのは、1996年にプロジェクトがマテングランドの古い村の一つキンディンバに中心的な研究サイトを設けて、コミュニティレベルでの詳細なフィールド調査を行った時である。

すでに述べたように、マテング社会の中にも、今日ではキトンゴジという行政単位があり、それがBalozi(10人組)という単位で把握されている。しかしこれは独立以降のウジャマー社会主義の中で行政組織として、上から構成されたものだ。しかしそうしたものが作られる以前にもマテング社会の中には自生的な政治組織が認められ、それを末端で構成するものとしてムシという集団が存在していた。ムシはすでに述べたように、いくつかの世帯が集まったものだ。この紐帯を作り出すものがセングという社会的慣行であった。〈セング〉ということが話題となった時、村のある長老は驚くような顔をして、「セングはマテングのもっとも深いものだが、どうして知っているのか」といった。このように1996年のマテング社会の中では、日常の生活のからは消えてしまって、すでに遠いかなたの事柄だったのである。

(2) セングの蘇り

マテングの中で、眠っていたセングの記憶が蘇ったのは、この地域でのJICAによる技術協力のプロジェクトの中であった。その活動のひとつに、人口約3,000人のキンディンバ村における hidro mil (水力製粉機) 建設事業を通じた「参加型開発」の試みがあった⁴。hidro milとは、河川の水力を利用して、水を高いところから落とし、その力を利用して粉砕機をまわす

構造になっている。このような hidro mil は、ムビンガ県ではすでに数カ所に設置されており、住民にとっても馴染みのあるものである。プロジェクト地のキンディンバ村から、近隣の村の hidro mil に製粉にしているケースも多々みられた。

hidro mil の設置にあたり、この社会開発の場面での外部のアクターとしては、ソコイネ農業大学地域開発センター (SCSRD)、県、カリタスがあげられる。しかし内発的発展をめざすこのプロジェクトの中でその核心をなすことの一つは、住民側がその主体をどのようなかたちでどのような目的のもとに組織するかということであり、なによりも、住民側の主体性と内発性が期待されていた。その社会開発に対する、内発的なその住民側のグループの組織化の重要な局面において浮上してきたのが、セングという言葉であった。住民にゆだねられたグループの名称の選択において、このセングという名前とその理念を持ち出したのであり、その動機として、新しく選出された「セング委員会」(=カマティ・ヤ・セング) のメンバーの一人は、「人々が集り、重要な課題を議論し、目的に向かってともに働く場にしたいということを考えたら、セング (という名称) 以外に考えられなかった」と語ったという (荒木[2006: 17])。

(3) 新たなセングの主体と力

ここでの「セング」の蘇りは、もちろんかつての社会慣行であるセングの再生ではない。村の人の中に記憶されている〈セング〉の精神が、農村における社会開発の中で、市民社会の形成を促す事業の参照枠として持ち出されたもので、セングは新たな形での展開をみている。例えば、新たに生まれたカマティ・ヤ・セングのメンバーをみると、荒木[2006]が指摘するように、「キンディンバ教区の議長と神父、村落行政官 (VEO)、村落自治メンバー、前農業普及員というように教会と行政の双方にまたがったの再編成によって形成されたものである」。しかし、カマティ・ヤ・セングのメンバーたちは、セングの精神を受け継ぐというのだ。

キンディンバにおける社会開発において、このカマティ・ヤ・セングという名前が与えられ、村の開発主体が作られてから、このグループの開発プロセスへの参加と貢献は目を見張るものがあった。ハイドロミルの用水路を開くための事業として、村落内部の遠隔地からも老若男女をとわず、数百人の人が馳せさんじ、まさに村を挙げての事業が行われた。

このような住民の極めて熱心な社会参加の背景の一つとして、このプロジェクトが、女性労働の軽減というマテngo人にとってもっとも重要なベーシックニーズとかかわるものであったことが挙げられる(荒木[2006])。しかし、このような地域経済としての経済的な適合性以外にも、プロジェクトが、<セング>という名前の下に統合され組織化された意味も大きいと考えられる。その一つは、そこには、<セング>という理念が村の中で持つ小さな集団の利害を超えた公共性、さらには、全ての人があるそこに参加しようという開かれた場としてのイメージがあり、村人の<われわれ>意識を掻き立てているのだともいえよう。

そしてセングによって支えられたこのようなマテngoの住民組織のあり方は、市民の学としての社会開発に対応する住民の組織の主体として、プロジェクト全体を通して突出した大きい意味を持っていただけでなく、キンディンバの住民の活動の中にも、他の活動との間に質的な差異をもたらすことになる。プロジェクトが推し進めた社会開発の中では、2002年以降、養蜂、植林、養魚、低地利用など小さな活動が生まれた。これはもともとマテngoの中にあつたゴケラなどの共同労働と重なるものであり、助け合いが強調されるが、一方でそのグループの利益のために行うという排他性が存在する。

これに対してセングのプロジェクトの中では、ハイドロミルの製粉機の使用料が極めて低額に抑えられるなど、村の中の豊かな人も貧しい人も同様に参加できるものであり、セング実行委員会のメンバーもボランティアとして働いている(Sugimura [2004])。これはセングという社会慣行の中にあつた公共空間を作り出す機能と重なるものである。またハイドロミルの利用はキンディンバの村人の中だけに閉じたものではなく、遠路はるばる来ることをい

とわないのであれば、村外者が利用することもできる公共空間として展開しているのである。

このようにマテング社会におけるセングの再創造は、すでに一つの近代化を受けた村落社会を前提とした世界の中で展開している。しかしそこでは近代化が農村の伝統を一掃するのではなく、かつてのセングとその精神のイメージーションが顔をのぞかせ、新たな組織化を誘発する内発性の核心に置かれているのである。

おわりに

すでに見てきたように、内発的發展の呼びかけに応じて村の側の開発の主体としてその名前を付けられたセングは、マテング伝統社会の中では、助け合いの場、ともに食べることに支えられた共同性を生み出す母体でもあるが、セングに見られる共食慣行は閉じられたものではない。一定のメンバーシップはあるが、常に外部からの訪問者が招かれ、セングの世界に入れられる。同時に、第一節で見たように、マテング社会は同質の人々の集まりではなく、共同体の内部に異質な人々を組み込んだ混住多民族共同社会という側面をそもそも持っている。これまでの「共同体と公共性」にかかわる議論の中では（齋藤 [2003:5-7]）、共同体が閉じた領域を作るのに対して、公共の空間は開かれた空間であり、公共性は誰もがアクセスしうる空間であるといわれる。この意味での「公共性」が、マテングの開かれた共同体を中核で支えるセングという社会慣行の中には用意されている。そしてこのような意味では、異質なものが内在化されることが可能である。すでに見たように、実際にセングの精神において再創造されたプロジェクトの中のセングにおいても、そのメンバーとして異質なものの共存が前提となっている。

このようにマテング農村の中に見られる公共性と向きあう共同体の原像は、開かれた共同体像として、また異質な集団をその内部に取り込むものとして、

これまで設定されてきた共同体のあり方とは大きく異なるものである。確かに農村共同体の中にも、日本の農村を事例とするならば、土地に縛られた固定されたメンバーシップが浮き彫りにされるが、アフリカの伝統農村社会においては、離合集散するようなかたちで集団が再構成され、その集団にあわせて資源は再分配される。集団を統合するものは、消費や再生産の場を契機とする生活集団である（杉山 [2007:103-118]）。

マテンゴ社会の多くは、より流動性を有するアフリカ農村と比較すれば、固定的で土地との強いつながりを見せる社会であるが、一方で恒常的に古い村から新しい村へと住民が移動するという流動性を含みこんだ社会であり、古い村の中でも集団の再編が展開してきた。マテンゴの伝統社会においてその流動的な集団を統合するのがセングであり、常に開かれた共同体を作り出す公共の場としても機能していた。そうした公共性の再創造の規範的モデルとして、セングが社会開発の場に立ち現れているのである。

西川（西川[2000:292-293]）は、1995年の社会開発サミットの「宣言」では、人間開発とそれを保障する社会開発は市民社会の参画なくしてはありえないことが明記されていることに言及し、途上国での社会開発と市民社会論の強い連関について述べている。しかしそれが第三世界、とりわけアフリカ社会の具体的な開発の現場でいかなる形を取りながら、いかなる意味として受容されているのかということに関しては、きわめて複雑な意味内容をそこに含むことになる。

小稿で見たマテンゴの事例においても、セングの再創造を軸にその理念の下に内発的発展を探るという視点は、これまでの近代的な経済発展の目標とは異なる人間開発を主題化するものである。その中では、経済開発に乗りにくい、ハイデンのいうような「捕捉されない」アフリカ小農世界の核心を作ってきた“情の経済”の源泉ともいえるセングという精神に学び、それを活かそうということになる（杉村 [2004:427-431]）。

そして同じことが、社会開発の中に構築されるアフリカの市民社会像の中にも顔を覗かしているということもできるだろう。セングの再創造の現場に

立ち会うならば、ここでは伝統は解体されるのではなく、農村の中に新たな「対等—平等」な対話の空間としての市民社会像を創造するための重要な規範として機能しているのである。もちろんセングの精神に与えられたその公共空間の性格が、〈個〉を中心においたヨーロッパ近代の「市民社会」の公共空間に対して、「共食」の社会的関係を基礎におくようなく〈個〉を超えた規範に支えられたものであり、そこに自ずから異質なく公共性〉の意味も付与されている（山崎 [1987:147-230]）。

マテングの共同体は、市民社会の問いかけに対して、屹立して壁となるのではなく、一つの共鳴性を持って対応している。そしてこのことの中には、これまでの近代・共同体・市民社会のアポリアをもう一度再考させる契機が含まれているようにも思われる。内発的な発展の視点の中では、アフリカ農村の中に、「市民社会」の不在を嘆くということ自体の諸前提となる近代化と市民社会像のあり方に関わるパラダイム、さらにはそれとの関係での「共同体」の具体的なありようが問われているのであり、そこでは、これまでの近代の視点から「共同体」を拒否する一元化された議論を、それを超越するものとして、公共空間のありようのアフリカ的な独自性の意味が探り当てられる必要があるからである。

このように、これまでの一元的な近代的市民社会像さらにはその背景にある産業主義的近代を超えた地点から、近代を拒否し、世界の中でも突出した停滞状況を示しているアフリカの現代的展開を捉えなおそうとするならば、近代と伝統という二元論的パラダイムに対して、むしろ伝統の内部差に目を向けてアフリカの位置を明瞭にしていくことが、アフリカの「市民社会」論においても重要になってこよう⁵。このような近代化、共同体、公共性にかかわる、アフリカ的特質の議論の進展に関しては、他地域社会との比較考察も含めて次の機会に譲ることにしたい。

¹ 村の最古からの話によると、これらの集落は1900年以前から開発されたとされる。そして数名の長老によれば、彼らの祖先はリテンボや他の地域から来たとされる。一方、ムツング、ワランジ、ジョンベのような集落はその後で開発された。これらはその外部からの新しいクランの流入やキンディンバ村の村落内での移動によって人口が村落内部に充填することによって形成されてきた。

² それぞれのンタンボが開発され始めた時期に違いがあるとしても、マテンゴランドの開発過程は多かれ少なかれ、同時に進められる。それゆえ一世代経ち、家族の規模が増加すると、そのメンバーによってンタンボの全体が占拠され、彼らは他のンタンボを探す必要性を感じ始める。しかしその時には、村落内部は、クラン自体の拡大や他の村落から移動してきて土地を占拠している他のクランの存在があるために、他のンタンボを獲得することはほとんど不可能であった。このような理由で、一つのクランは彼らのンタンボ内部で農業の集約化システムを採用しなければならなかった。そして人口に応じてより広い農地を確保するためには、その村落内部ではなく、村落外部の遠隔地を新しく開発していかなければならない。

³ このムシの形成過程は以下のようなものである。マテンゴの農村開発においては一つのンタンボを一つの世帯が占拠し、そこに住み始めることからその開発は始まる。そしてそのンタンボに家族数が増加してくると、これはムシを形成することになる。マテンゴ社会は父系制の社会であり、その息子達の中に男性の子孫を多数生み出した者があれば、そこにも新たにムシが形成されることにもなる。

⁴ 1994年から1997年まで、JICAの研究協カプロジェクト「ミオンボ・ウッドランドにおける農業生態の総合研究」が実施された。このプロジェクトは、タンザニア南西部マテンゴ高地において、ンゴロとよばれる在来農法の農業生態や、それを支える社会、経済、文化などを解明することを目的としていた。研究協力プロジェクトの実績に基づき、1999年から5年間の計画で、ソコイネ農業大学（Sokoine university of Agriculture: SUA）地域開発センター（SUA Centre for Sustainable Rural Development: SCSR）プロジェクトが始まり、その対象地域の一つとしてキンディンバ村が選択され、社会開発の一つとして上記の試みがされた。

⁵ セン（[2006:73]）は、伝統社会の中に存在する「公共空間」について、「たとえば、インド、中国、日本、韓国、イラン、トルコ、アラブ世界それにアフリカの多くの地域には、政治や社会、文化などの問題について長年、公の場における議論を奨励し擁護してきた伝統があります。そうした事実は民主主義思想の歴史で、もっとしっかりと認識されるべきでしょう。世界各地のこの伝統だけでも、民主主義は西洋の考え方である、したがって西洋化の一つの形態にすぎない、とたびたび繰り返されてきた見解に、疑問を投げかける十分な根拠になります」と述べているが、近代社会に対する対応として今日見られる第三世界の内部差ということを踏まえるならば、こうした伝統社会に存する「公共性」の意味の内部差についても、そこに立ち入って検討する必要がある。

<日本語文献>

赤羽裕[2006]『低開発国経済論』岩波書店。

荒木美奈子[2006]「タンザニア南部マテンゴ耕地における「地域開発」」（『開発学研究』第17巻、第1号）PP.15-20。

遠藤貢[2001]「アフリカをとりまく「市民社会」概念・言説の現在」（平野克

- 己編『アフリカ比較研究』アジア経済研究所) PP.147-186。
- 加藤正彦[2002]「タンザニア・マテンゴの掘り穴耕作とコーヒー栽培」(掛谷誠編『アフリカ農耕民の世界』京都大学学術出版会) PP.91-123。
- ハイデン、ゴラン[2007]「情の経済とモラル・エコノミー：比較の視点から」(『アフリカ研究』70号) PP.35-50。
- 松田素二[1999]「ナイロビにおける住民組織の二つの位相」(幡谷則子編『発展途上国の都市住民組織』アジア経済研究所) PP.194-235。
- 峯陽一[2003]「アフリカ経済と共同体—赤羽理論の再検討」(平野克己編『アフリカ経済学宣言』アジア経済研究所) PP.187-228。
- 西川潤[1988]『人間のための経済学』岩波書店。
- 齋藤純一 [2000]『公共性』岩波書店。
- 杉村和彦[1999]「マテンゴ農村の商品経済化と社会再編」(池上甲一編『東・南部アフリカにおける食糧生産の商業化がもたらす社会再編の比較研究』平成8年度～平成10年度科学研究費補助金、国際学術研究報告書) PP.137-155。
- [2003]「混作の構想力」(祖田修編『持続的農業農村の展望』大明堂)。
- [2004]『アフリカ農民の経済』世界思想社。
- [2007a]「アフリカ・モラル・エコノミーの現代的視角」(『アフリカ研究』70号) PP.27-34。
- [2007b]「消費の世界とアフリカ・モラル・エコノミー」(『アフリカ研究』70号)、PP.119-132。
- [2007c]「パラダイムとしてのアフリカ小農世界—20世紀の農林経済学を超えて」(『農林業問題研究』第165号、第42巻、第4号) PP.330-338。
- 杉山祐子[2007]「焼畑農耕民における生業と分配」(『アフリカ研究』70号) P.103-119。
- セン.A[2006]『人間の安全保障』集英社新書。
- 山崎正和[1987]『柔らかな個人主義の誕生—消費社会の美学』中公文庫。

<外国語文献>

- Basehart, H.W. [1972] “Traditional History and Political Change among the Matengo of Tanzania,” *Journal of the International African Institute*, VOL.XL II (4), pp.87-97.
- Hyden, G. [1980] “Beyond Ujamaa in Tanzania.-Underdevelopment and Uncaptured Peasantry,” London: Heinemann.
- Hyden, G. [1983] “No Shortcuts to progress —African Development Management in Perspective,” London: Heinemann.
- Hyden, G. [2006] “African Politics in Comparative Perspective,” New York, Cambridge: University press.
- JICA (Japan International cooperation Agency) [1998] “Integrated Agro-ecological Research of the Miombo Woodlands in Tanzania,” Final Report, JICA.
- Sugimura,K. [2004] “African Forms of Moral Economy in Rural Communities: Comparative Perspective,” *Tanzanian Journal of Population Studies and Development*, 11(2), pp.21-37.